

③ 愛をまとった世界へ

「いつか」なんて言葉を信じないで、「いま」会いたい人に会いに行き、大切に愛している人たちと一緒に笑い、共に生きる未来へ行きたい。そして、愛が重なる世界へ。

コロナウイルスが蔓延する前は、会いたい人の元へ、いつでも、どこでも、行くことができた。駅で待ち合わせをして、久しぶりに会うドキドキ感。私たちは連絡をとりあい手さぐりで距離を近づけていき、会えたときはお互いが顔を見合わせて笑った。いま思えば、その過程だけでも素敵な時間が凝縮していた。大学生になった私たちはルールのなかで最大限楽しんで、まるで子どものころに戻ったようにはしゃいだ。そんな時間は、私たちがどれほど成長して変わっていたとしても「お互い変わらないね」と全身で感じる事ができた。そして「またね」と手を振り、次も会えることを無条件に信じた。

会いたいのに、時間的に余裕がなくて後回しにしてしまったことってないだろうか。

大学での勉強が忙しくなると、どうしても毎日をこなすことに一生懸命になってしまい、友達との約束を先へ延ばしてしまう。だって、今が落ち着けば、私たちは会いたいときにまた会えるから。時間だけが私たちを制限しているとあの頃は思っていたから、「お互い落ち着いたときね」と送った。「いつか」会いに行けばいいと。

そして、1年半前の冬、コロナウイルスによって「いつか」はすごく遠いものになった。それは私たちの生活を必要最低限のものだけで生活するように強いた。大好きな人へ、ところへ、行くことは自粛しなくてはいけなくなった。必要最低限とくくられた言葉がたくさんの行動を制御した。記憶を呼び起こすと、脳裏に浮かぶのは家での生活ばかり。そこには大好きな人たちはおらず、淡々とこの変化に慣れなければならないと歯を食いしばる自分がひとりいた。大学へ行けるようになって、密を避けて距離をとってマスクをして過ごす日々が続いた。夏には終わるだろうと多くの人が思っていたコロナウイルスは、今もなお、私たちの生活を脅かしている。「With コロナ」という言葉の通りになった。私たちはもう少し、このウイルスと闘い生きていかなければならないみたいだ。今までの日常が非日常になり、その非日常はいまの新日常をもたらした。

そんな非日常に慣れたくないのに慣れてしまったころ、私は「いつか」を封印しようと決めた。

「いつか」は魔法の言葉だ。自分の気持ちさえあれば、将来どうとでもなると思っていたから口にできた言葉。だけど、いまの私に「いつか」はもうない。「いつか」できると思っていたことが時間の制約ではなく、他の要因でできなくなることがあることを知ったから。それは自分の力だけでどうにもならない巨大で未知なものが関係することもあると。

その「いつか」を封印した先には「いま」を愛することが待っていた。

コロナ禍が終息したら、会いたい人に会い、大切に愛している人たちと一緒に笑い、もっと共に生きたい。そう強く願うのは、なんでもない日が特別で、脆くて愛おしいことに気づいたから。だから、「いま」生きているこの瞬間を大切に抱きしめ、いま行える最大限のことをしながら、それが叶う日を夢見てマスクの下で、私は友達と大きく笑うだろう。そして、小さくて「いま」そこにある幸せを重ねながら共に生きたその先には、愛が深くつながる未来があると信じたい。向き合うことを疎かにしてしまったつながりをできることならもう一度手繰り寄せて修復をして、いまから握る手は重ね合わせてぎゅっと強く。愛があるから嫉妬、僻み、争いが起こるのだとしても、愛があるから救い救われる関係があることの方が強いと思いたい。同じ試練を乗り越えた者同士で創り上げる「愛」を纏った世界で、多様な人が自分を大切に、そして共存できる未来へ行きたい。